日本にとっての「漢字」

―過去、現在、未来―

笹原宏之　早稲田大学
sasa@waseda.jp

要旨

日本の漢字は、世界の文字の中で最も多様性が豊富であり、形音義において多層化している。そのうえ多くの日本人からは漢字は自国の格が高い文字と意識されており、過去の時代から、字種には国字、字義には国訓、表記には当て字などが生み出されてきた。日本では、事物に概して情意性を尊重する傾向から漢字にも表意性を追求し、字源俗解やニュアンスによる使い分けが頻出するとともに、個々の文字感や表記感も日本語話者の間で広く共有されている。

表語文字であった漢字の表意文字化、さらに表イメージ文字化も進展しており、政治、経済にも影響を及ぼしている。漢字の使用における社会的な変異も、職業、趣味、年代、ジェンダー、個人、場面などによってしばしば発生し、細分化が複雑な形で進展を見せている。書字活動に関する観点からは、多様化が認められつつある社会において、字体に対する一元化が進む一方、字形の多様性に対する理解が少しずつ広まってきていることが指摘できる。日本語教育の現場においてもこうした現状の捕捉が不可欠である。

1　はじめに

日本の漢字は、世界に類を見ない特色ある文字であり、日本語教育に携わる全ての人たちが全体と各部分を客観的に理解しておく必要がある。

漢字は中国人が中国語を表記するために作りだした文字である。しかし、現代のほとんどの日本人は、その事実を認識しつつ、「漢字は日本の文字である」という意識を抱いている。

「日本人なのだから、漢字が書けないと恥ずかしい。」という声をしばしば聞く。漢字を用いる中国人や漢字を用いていた韓国人よりも強く、漢字に対しては愛着やコンプレックスを抱く人が多い。そこには漢字に対して従属的な姿勢も指摘できる。背景には、ひらがなやカタカナに比べ、難しく意味を有する漢字は別格という意識があり、それはすでに平安朝の表記体の社会的な選択傾向に萌芽を見出すことができる。

一般の活字メディアでは漢字含有率は 30～40％程度であるが、街中では漢字はひらが

な、カタカナ、ローマ字、数字というそれぞれの文字種より 3 倍ほど多く使われている。言語景観としては概してなおも日本語が圧倒的に多いが、漢字圏に分類されることがあった韓国やベトナムとは状況を異にしている。

開封後要冷蔵

卒業絶対無理。

といった漢語を表記する漢字だけから成る長い単語や句、文さえも見受けられる。日本語は、漢字から脱化した表音文字であるひらがな、カタカナのみで表記することもできる。ローマ字でも表記しうる。それらは効率的だ、かわいい、かっこいいという声がある一方、読みとりにくい、誤解を招く、幼い、あざとい、機械的、日本的伝統的でないといったマイナス評価も聞かれるが、理性より感性に基づく意見が多い。

そうした日本語で使われる字の種類は、どのくらいあるのか、字彙の要素の数を正確に答えられる人はいない。頻度 0 の文字(例：「竍」　デカリットル)が辞書などにある一方、位相すなわち社会的、地域的集団、個人による使用の差があり、集合が閉じていないために頻度 1 まで含めれば、誰も数え切れない。物事に曖昧性を容認する側面がうかがえよう。

言語には表現そのものに、独自の文化や発想に裏打ちされた語彙がある。日本語でも個々の語の翻訳を行うと、漢字圏にあっても困難を伴うことがある。日本語ではことに論理的な語よりも宗教観、情緒性に関する語に、それは顕著に現れやすい。

例：日本語版：「千と千尋の神隠し」

中国語版：「千と千尋」　　翻訳不能な語が省かれた。

韓国語版：「千と千尋の行方不明」　ヘンバンブルミョン。ニュアンスが失われる語で訳された。

外来の文化に対するカスタマイズを全方面で行ってきた日本人は、漢字文化圏の中で、他のどの民族よりも漢字に対する加工を多方面に亘って行ってきたといえる。さらにそれらが現在にも引き継がれて、なおも多様性を増しつつある点が特筆できる。

日本では、複数の文字種を併用し、文字にも異体字があるなど要素が豊富である。そのうえ個々の字の音訓義、用法つまり機能にまで多様性があり、語の表記にも揺れが多数残っている。そのことを利用し、さらに相互に影響させ合って、こうしたニュアンスや表現価値すなわち受け取る側の感性面から見れば表記感を場面ごとに醸しだすのは、世界の言語・文字の中でも特異なケースである。

それが日本語を習得する人々にとって、大きな障壁になっているとともに、かけがえのない魅力ともなっている。ここでは、そうした日本の漢字について説明するとともに、どのような日本人の心性が読み取れるものなのか、あらゆる角度から紹介してみたい。

2　スイスに関して

今回お招き下さった本会を擁する国の「スイス」という名は、フランス語 Suisse から

とされる。これを「瑞西」と書くのは、日本で明治期からであり、中国では清末から現在まで「瑞士」である。これは清代に広東あたりで良い意味の字を用いた音訳であり、それが江戸時代に日本に伝わって、「士」を「西」にして定着を見たものである（黄河清『近現代辞源』など。参考：シャルコ・アンナ 2022）。

日本では戦後、当用漢字表によって当て字を公的に排斥し、国名もカタカナで書くようになった。外務省や大使館もカタカナにしたようだが、今日でも各種の協会、出版社（外務省、大使館も？）などが略称として「日瑞（にっすい・にちずい）」「駐瑞大使」のように使う。なお、スウェーデンも「瑞典」を用いるが、スイスと区別するため「典」を用いることもある。

話題になることが多かった都市のジュネーブも「寿府」と表記すると舶来趣味やノスタルジーが喚起しうる。中国では清末に「日内瓦」が音訳として現れ、定着したが、これでは日本では表記による具体的なイメージの惹起は生じにくい。ハングルやローマ字という表音文字しかほぼ使わなくなった韓国やベトナムでも同様である。

3　文字の多様性

日本語を表記し、ときに造語成分ともなる文字には、あらゆる面で多様性が見出せる。１世紀以降、中国から漢字を受容した後、中国、韓国から伝来する漢字を時代ごとに選択しては受容し、そして様々なレベルでカスタマイズしてきた。

・文字種　―漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字・アラビア数字

通常の漢字仮名交じり文では、これらの文字種が混用される。これは、世界でも例を見ない。「くノ一」「５ｐ写メる」のように混ざることさえある。漢字を「真名」つまり真の文字と見なすのに対して「仮名」すなわち仮の文字と呼んだ名称には、謙譲やコンプレックスの意識が隠されている。

読みの可能性の多さは、

何で来たの？　　（メールや LINE の文面に）

私の家来ちゃいますか？　（迷惑メールの文面に）

など日本語使用者にさえも日常的に混乱を引き起こしている。

一方、車内表示で「つぎとまります」では、ひらがなばかりで読みにくそうだから「次止まります」とする。しかし漢字が続いて読みにくかろうと「つぎ止まります」や「次とまります」と変える、といった配慮による表記行動も広く観察できる。文字種や表記に、一種のバランス感覚まで働かせるだけでなく、読み手への配慮は、自身の品性を保つことにもつながる、と意識されることがある。

文字種の切り替えは、書記行為においては手間がかかり、効率性に欠け、経済的でないが、読者にとっては即座に意味を取りやすくなるケースが多い。ここでは視覚によるコミュニケーションにおける労力を書き手が負担していると見ることもできる。

カタカナはおもちゃのような新しいイメージを抱かれる一方で、親しみが弱いと感じられることがある。語のレベルでは、カタカナで表記される語に、意味やイメージの差が生じることがある。Catherine すなわち「キャサリン」「カトリーヌ」では、金髪とチアガール、茶色い髪の休日にお菓子を焼いている人はどちらと感じるだろうか。

・字種　―文字の種類・一つ一つの字

日本語の表記では使用する字の種類も豊富である。「常用漢字」に限っても、漢字が2136 字もあり、そのほかにも 1000 字以上が一般に使われている。ひらがな、カタカナもおのおの 50 字以上ある。

これらの個々の字には、様々な字源説が漢代以前から唱えられてきたが、現代の日本では字源意識や文字感が、

人　子　米　鉄　桜　渋　吐　H　8

などに個々に抱かれ、広く流布するものさえある。中国以上に様々なことが語られ、ここには、見立ての文化、察しの文化、意味付けやムード、ストーリーを好む傾向を見出せる。意味を持つ字、複雑で有機性を感じる字に、表音文字以上の価値を見出しているのだろう。

この妄想にもつながる想像力は、物語、小説、漫画、アニメにも連なる。情緒性に傾く性格が「漢字は奥深い」という繊細で情感が勝る漢字観を生み出す。そうしたいわば文字観の違いが中国製の漢字と日本製の漢字との間に見て取れる。

漢字　話　梅　休
国訓　咄　椿　儚
国字　噺　榊　働　峠　糀　粁　躾　鱈

和語のイメージを喚起させる会意が多く、自然観や生活環境を反映し、樹木名、魚名を訓とするものが多い。旁に「花」「雪」「上下」をしばしば選ぶ点も特徴である。

これらは、漢字教育で覚えるほか、文字生活の中で覚える字も少なくない。覚える場所は教室や店内、街頭など様々で、あらゆるメディアが教科書の働きをしている。例えば「鱈」はコンビニの商品パッケージや寿司屋の湯飲みで、という若者が多い。「しつけ」を虐待ととらえていた人が「躾」という字を見て誤解だったと悟ったケースもある。一方、「躾」という字に圧迫感を抱く若年層も増えつつある。

しかし、常用漢字でなく、学校で教わらないこともあって、こうした字を読めない人が若年層に増えつつあり、思わぬ解答が次々と出てくる。「躾」を「エステ」と読む学生さえもいた。

好きな字は何か、と尋ねると、日本人は様々な思い入れやエピソードを語る人が多い。一方、中国人は、無い、考えたことがない、と解答する人が少なくない。

・**字体**　―文字の骨組み

日本は戦後、当用漢字で新字体を採用したが、「本来」志向や字体のコノテーションから旧字体（いわゆる康熙字典体）もなおも根強く残り、使い分けや世代による使用傾向の違いが生じている。上書き保存ではなく別名保存をすることで多様化と繊細化を進める趨勢がここにも現れている。そこには、やはり見立て、意味付け、字体の醸しだすニュアンスや雰囲気すなわち文字感による選択行動が見出せる。

文字感は、実際には読みとしての語も浮かぶことが多いため、表記感と重なることがある。多様性は、こうしたいわば別名保存(中国、韓国は上書き保存)のような現象によって生じるのである。音声よりも目すなわち視覚情報で察するもので、ハイコンテクストな文化も背景にある。個々人の生活体験によって更新されていく。

龍 vs 竜
檜 vs 桧
螢 vs 蛍
嬲る vs 嫐る
大学 vs 大學
慶應 vs 𢘓𠮟
鬱
薔薇
醤油
織
へ　〻　「〃」を加える。

「嬲」「姦」「嫐」には、フランスやスペインの大学で、日本語学習者たちから思わぬ読みの推測が提示された。

パリジェンヌ　　「嬲」: まもる　　「姦」: フェミニスム
マドリッドの男子　「嫐」: しあわせ

日本では一般に、略字がとくに若年層から好まれなくなってきた。規範意識が硬直化し、場面による使い分けを負担に感じ、そもそも思い立たない、習っていないので書き方が覚えられない、書き順が分からないという。入力すれば容易にフォントが表示、印刷される現在、文字を手書きする機会が社会全体で激減していることがこの略字離れの要因であろう。

門　冂　　第　才　　曜　旺

多くの人が間違える共通誤字には、

未　末　＊長短が示差特徴として機能している。
専　博
粧
虐
裸
嗚

のように混淆によるもの、

摑　掴　扌固　誤字を書くくらいならば略字を書くとよい。「摘」も混淆しているか。
痔　疒寿
鬱

のように点画と構成が複雑なものが目立つ。手書きする機会よりも、キーパンチやパネルタッチ、フリックなどの操作により変換機能を利用して画面に目当ての文字を打ち出すことが増えた。そのため、点画の構成よりも字の全体をパターン認識する傾向が強まっている。常用漢字表もその傾向を追認し、「鬱」などは電子機器で正しく打ち込めればよいとしている。

なお、筆順は歴史的に多様性があった。現在、漢字政策でも漢字教育でも実は「正しい」ものすなわち標準を示していない。習慣を重んじてはおり、確かに伝統的なものは、右利きの人にとっては自然な筆法により字形を整えて書き上げる効用がある。

手書きには、中国出身者の「愛」（夂を友と書く）のように、韓国出身者の「全」のように非母語話者に特有の字体も見出せる。

・字形　―字の具体的な形

字体は、字の骨組みに関する概念であり、現実に現れた形を字形と呼ぶ。「女」「木」「令」の字など、試験などで採点者が〇にしたり×にしたりして、内外の学習者らを悩ませてきた。これらの揺れは、中国にも見られたが(笹原 2017)、日本においてより顕著で、国民性ともいわれる几帳面さと大らかさとのうち、根拠を欠く前者が勝りがちなケースといえる。

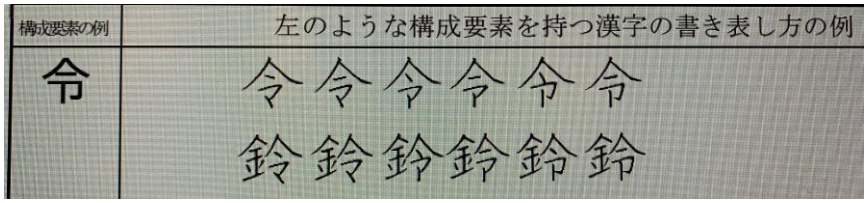
新しい年号は、15 画以下、常用漢字、国書（『万葉集』など）からといった条件から「令和」となった。

内閣府辞令専門職を務め、書家でもある茂住修身氏は、官邸で安倍総理から、分かりやすいようにと活字の通りに毛筆書きするように指示を受けたが、3 画めは点にするように進言し、承諾を得てこのように書いた（『令和誕生』、『大東文化大学 byAERA』　2020 など）。

なお、新年号の候補には『古事記』などから「天翔」も挙げられ、初めて人名用漢字が採用される可能性があったが、葬儀社名に使われていたために候補から外された。

昭和時代において、学校や教科書では、教科書体の統一が図られた。文部省初等中等教育局長が、「令」の「字体」（通用字体の骨組みの意の字体とは異なる字形差つまりデザイン差を指す用法）は「人丶マ」で統一するように通達し、教科書も右へ倣えとなった（1958 年）。このように実はかなり統一が施されていた（文化庁国語課に作っていただいた『教科書体字形一覧』など参照）。

国語分科会において、「常用漢字表の字体・字形の指針」（2016）を作成した際には、「令」の字形として 6 種も挙げなくても分かるのではという意見が出たが、（何か嫌な予感がして）誤解が後に生じないように、近年までの用例に富む 6 種を挙げておいたのは正解で、功を奏した。



デジタル化の影響もあって「令」と手書きする人が急増している。「令和」だけは官房長官に従ってこう書くという人たちも少なくない。

漢字に対するイメージが先行してしまい、知識不足から漢字をかいかぶり、規範意識が硬直化した結果である。それは、曲線が連続的に記されうるひらがなの形にまで及んでいる(「さいたま市」「さぬき市」　笹原 2006)。デザインレベルの巧拙、美醜や、書写の際の態度による丁寧さ・ぞんざいさと、字体の正誤とが混同されてきたことに対して、2016 年 2 月に文部科学省文化庁から出されたのが上記の指針であった(講演者は副主査として取りまとめに関わった)。

字形のとめはねが示差特徴としての字体差となって字種の区別を表すようなペアは、表内には 1 字もない。「干」をはねて表外字の「于」となるような別字化が起きない限り、とめはねはデザイン差にすぎないので、よほど違和感が生じるものでない限りは、黙認するとよい。

どのように指導と採点をしていたであろうか？

木　　女

筆記行為は、字体を理解し、記憶するうえで有効である。ただし、誤記をしたからといって一律に 10 回も書かせる必要はない。個人の資質、能力や字によってケースバイケースであってよい。

・書体　―字の肉付きのようなデザイン

個々の文字種には、統一的なデザインが施される。筆跡とフォントのそれぞれに見られ、それらを書体と呼ぶ。印刷活字では、明朝体が主流となっているが、日本ではしばしば中国よりも丸みを帯びたものが開発されている。日本生まれのゴシック体、ナール体などもよく使われており、新作のフォントも増加中である。

小学校の教科書などに用いられてきた教科書体には、毛筆のようなデザイン上のノイズがあり、字体と混同されたり字形認識を混乱させたりするため、UD フォントも開発され、かなり普及してきた。和文の新旧様々な書体(フォント)もコノテーションを生み出す。書道のような芸術に連なる方面といえる。

なお、漢字の用途と個別の使用の目的や指向性は、以下のようにまとめられる。漢字の使用は、表語機能を利用した表記を生むのであるが、情緒的な余剰表現、さらに日本では特定の語をもたない表意的な表現（後述）さえも行われている。

学術
芸術　実用　信仰
遊戯

歌舞伎の勘亭流や落語文字、相撲文字などの江戸文字には、客の入りを願って余白を狭くする、人気がくまなく出るようにと左右対称に近づける、倒れないようにするといった意味まで託されている。文字霊のような演技担ぎが含意されているのである。これらにも読み手からそれに沿った、あるいはそこから外れた表記感が表明される。次の２字は、何と読むだろうか。

横綱

文字感として、明朝体は堅苦しい、ゴシック体はかわいいと感じる若年層が増加しつつある。なお、「かわいい、きれい、うつくしい」といった評価の語に対する反応は、日本では年齢により変動する。

中華フォントと呼ばれる中国系のフォントが日本でもパソコンやケータイ上で日本語を表示するケースが増えており、簡体字に対する接触頻度も増しつつある。

・字音・字訓・字義

文字は、基本的に読みをもつ。漢字は段階的に受け入れたり変化させたり創出したりしては別名保存してきた各種の字音(漢語)に加えて、大抵の場合、字訓(ここでは訓読みの意で、語種では和語がほとんど)も有するため、表語文字に分類される。字義には日本で独自に生まれたものが多数あり、国訓と呼ばれる。こうした出自の意識は一般には抱かれていない。

「邪馬台」国　　「倭」　　奈良時代の間に「和」に
「日本」　ニッポン　→　ニホン

「人」　中国　ren2　＊ローマ字は子供用　＊発音の地域差は大きい
　　日本　nin　jin　訓読み　hito
　　熟字訓　一人　hitori　大人　otona　…

ここでも各種の要素が１：多の対応を呈している。別名保存することで細分化され、機能やニュアンスに差も生じうる。「美」はビ・ミの間で、語感・音感の差が生じている。自己紹介では名前の字を「美術のビ」「奄美大島のミ」と説く婉曲、謙遜も聞かれる。「主」は「シュ、あるじ、ぬし」のそれぞれの読みによる語がそれらの居住地の違いを呈し、さらにスケールの違いまで表出する。

漢字を組み合わせることで熟語ができる(仮名表記されることもある)。複合語を漢字表記すれば、それも送り仮名などの表記法によって熟語の形態を取ることがある。

音読みの語を漢語、字音語と呼ぶ。その中に、和製漢語が含まれている。「火事」「科学」「腺」「哲学」など、日本人が作った漢語は少なくない。中国、韓国、ベトナムへと渡ったものもある。「幽玄」は、中国では道教などで深遠な悟りの境地を指す意味であったが、日本では平安時代以降、情趣の美を指す熟語レベルでの国訓化が起き、和歌、能楽などの独特な価値を表現した。「旦那」は、男性配偶者を指すが、もとは漢語の「檀那」で、仏教語としてサンスクリット語の「ダーナ」を音訳したものだった。英語では、「donor」(ドナー)が同じ語源をもつ。

「傾城（けいせい）」は、国家を傾け、滅亡させる原因となる美女を指したが、日本では江戸時代に同音の「契情」となり、個人的に情けをかける遊女、花魁(おいらん)を指すようになった。スケールが縮小するケースがここにもある。

国立大学では、大学名を２字に省略して記す慣習がある。

東京大→東大　　東北大→北大　　北海道大→海大

漢字は、凝縮力をもつのだが、学術用語、専門用語など一般になじみの薄い語、さらに簡単な字による医学界、薬学界の「食間」「座薬」でも患者らに語構成と語義に誤解を与えてしまうことがある。

表音文字としてとらえられがちな漢字も、「奈」「莉」のようにある一方で、スイッチの「切」など読みを意識しない表意的な用法もあるのが、日本の特徴の一つである。熟字では、

料金表の「小人」「月極」

新聞の「捕邪飛」

絵の具の「深赤色」「濃青色」

商品パッケージの「極小粒納豆」

なども表意文字として機能することが多い。発音を意識せずに書くこともあり、語に対する表記行動ではなく概念に対する書記行動と言える。

日本人は、中国語話者以上に漢字に意味を見出そうとする。上述のように成り立ちにさえ俗解を繰り返す。国字はその裏返しとして生み出されたものといえ、会意文字が大部分であることは、意味への志向性、情緒性に起因するほか、和語は漢語に比して長めの語形が多く形声文字が作りにくかったことも関連する。

「障害」「子供」などは、特定の字の特定の字義が強く意識されるようになったことで、表記にゆれが発生している例である。後述する表記の多様性に関わってくるが、根拠の希薄な個々人の文字感より、当事者の意識を優先すべきであろう。

古くはすでに奈良時代の『万葉集』に「恋（こひ）」に対して「孤悲」という万葉仮名表記が多用されている。近年、八百屋ではニンニクに対する「人肉」が店頭表示から消えつつあり、スーパーなどでは「豆腐」まで「豆富」に変わってきた。中国では一般的な「豆腐脳」「臭豆腐」「血腸」などの即物的な比喩(メタファー)による表現も、日本ではレストランの看板やメニューに載せることが難しい。

造字の際に、漢字で語のおおまかな発音(古代中国人は核となるイメージも抱いた可能性はある)を表そうとする形声文字と、意味を漠然とでも表そうとする会意文字とのいずれを選ぶかで、日中は対極となった。漢字の「轢」と国訓の「擽」もその例といえる。「混凝土」「倶楽部」(中国ではかつて「克臘勃」と訳された)や「浪漫(的)」(夏目漱石の作。中国では「羅蔓蒂克」などが当てられていた。「的」を用いた英語の接尾辞「-tic」への訳は明治初期から)のように素材、自然や人間関係などの意味や情緒性が重んじられ、カタカナ表記が激増する中であえて選んで使用されることがある。

漢字が語の意味を変えるケースもあり、たとえば「性癖」はただの生まれつき(多義字の性の字義の一つ　性善説の性)の癖という意味から、個々の字義からフェティシズムの意味に変わってきており、国語辞典も後追いしつつある。イメージ重視のほか、漢文離れによるといえる。

4　表記の多様性

一つ一つの語に対する文字による表記に、多様性が存在するのは、日本語の大きな特徴といえる。中国では漢字の読みは基本的に１字につき１種しかない。フィンランド語やスペイン語はスペルと発音との対応関係に比較的単純な規則性がある。独語・仏語・伊語な

どもルールが示せるが、英語はその規則化が困難なほど例外が多く、いくつかの学習法も開発されたが、「fish」もさまざまな単語の例から「ghoti」と綴ることさえできると揶揄されるほどである。ただし、綴りによって同音語の書き分けができることがある。

日本では変化のやまない文字・表記の体系や個々の文字・表記は、時代ごとに、揺れを起こす種々の原因を有している。様々なレベルの条件があり、政治、経済以下、挙げていけば 13 種を超える。

政策　(漢字制限)
学校教育(漢字教育)
地理　(方言文字・方言漢字)
物理　(筆記、電子機器入力の素材)
生理　(体力、利き腕)
心理　(論理、情感)

などの位相すなわち集団と文字の産出状況、さらにその環境の違いが要因となって、文字・表記には変異が発生する。

常用する漢語である「躊躇」は、新聞では「ちゅうちょ」と定められているものの、紙面には漢字表記がしばしば出現している。手で書くときにはかな表記、読むときには間が抜けているために漢字表記が良いという意見もある。「鬱」は 13 年前に常用漢字に追加されたが、手書きできる人は多くないものの、入力時には「鬱」を用いる人が多いことが、文化庁の「国語に関する世論調査」で明らかになっている。

現在、英語では一つの単語が公な場面でスペルに揺れを持つことは多くは稀で、イギリス式とアメリカ式とで、そのニュアンスを帯びる程度にすぎない。blond と blonde でジェンダーを分けるのはフランス語による。一方、日本語では「妻を探す・妻を捜す」「適当・テキトーな意見」「1 杯飲む・いっぱい飲む」のように、意味（ときにさらにアクセントまで）の違いを書き分けるケースは、適切な表記を選び損ねると重大な誤解を招く。

表外訓や表外字は「異字同訓の漢字の使い分け例」に載せられなかったは、そのほうが「思う」「想う」、「会う」「逢う」、「寂しい」「淋しい」など情緒性が高いという傾向がある（「涙」「泪」は異体字）。1 つの語に対して、多くの用例を見出せるものもある。「ひと」「おんな」など人間に関するものに特に顕著で、「おとな」にも「因囚」「悲観的現実主義者」のようなものがある。日本語に特有の振り仮名という方式も、この新作と使用に寄与している。また女子高生が飾りとしてこのように国構えを付けるケースは、位相表記と位置づけうる。「ひと」の表記は 60 種を超える(笹原 2010)。

動物の「bear」を例にとれば、文字種による表記の違いだけでも以下のようになる。絵文字やときには顔文字でさえ、公的な性質が弱くかつ親しみやすく柔らかな文面であれば「クマ」という読みと結びつきうるのが日本語の特徴である。

熊　クマ　くま　ʕ•ᴥ•ʔ(顔文字)　 (絵文字)

正書法が未確定の状況にあり、揺れが併存している。動物学、あるいは教科書や新聞ではカタカナとするといった規則も個別にあり、一般の意識と使用に一定の影響を与えている。漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字などの形状、それらの個々の字の形状から生じるイメージ、表記感により、語ごとにニュアンスレベルでの書き分けも生じており、そこに傾向性も見出せる。

イメージはやがて俗解を生み、「空手」「唐揚げ」のように社会性を帯びて広まることがある。年齢の助数詞「歳」「才」に使い分けが意識されることさえ起きている。NHK では細かな字の図表などで可読性を維持するために「〇才」の使用を認めており、単なる略記である。

俗解が「込む」「混む」のように漢字政策の規定を動かすことさえもある。後者は 100 年以上前に出現した当て字だが、混雑しているからコムという語源意識の変化により定着し、常用漢字の訓に追加された。ただし、「嬉しい」「家（うち)」「お腹」など広く流通している表記がすべて採用されたわけではない。

表記が、語のニュアンスを変えることもまれではない。「まつげ　まゆげ　はなげ　すねげ」では、「け(げ)」に不統一を生じる人が少なくない。NHK や新聞などマスメディアは体系性を求めようとするが、現実には個々人が「毛」が汚い印象を与えることがあるなどといい、美容広告や化粧品などで個別の事情が生じている。

このように漢字は、カタカナ以上にマイナスにもプラスにも大きく振れやすい。日本では「漢字が好き」「漢字が嫌い」という文字種に対する好悪の意見のほか、「好きな字」「嫌いな字」もよく話題に上る。後者には、意味が悪いだけでなく、書きにくい字、バランスが取りにくい字がよく挙げられる。

文字種による語の表記感の違いは、次のようなケースにも立ち現れてくる。この順で好意が下がるという女子学生が複数いる。

好き　　すき　　キライ　　スキ　　きらい　　嫌い

この「キライ」は、男子学生に、ツンデレで実は好意がある、と見る人があるが、女子学生には、非常な嫌悪感を含ませるとする人が多く、性差が見出せる。カタカナは良くも悪しくもコノテーションを動かしやすい。表記がイメージを超えて、含意的な語義にまで変化をもたらすこともある。「好き」に「きらい」とルビを振る表現もあり、「好き 🥺 」を「きらい」と読む人たちさえいる。

こうした種々の原理に基づく表記行動が、日本語社会では日常的に行われている。日本語の語彙の多様性とあいまって、表記体系は複雑さを増しつつある。

5　社会・場面による多様性

日本語の文字・表記にはこのようにあらゆる点で多様性が見出せるのだが、その原因は

どこにあるのだろうか。改めて考えておくと、一つには、文字、表記そのものの要素と機能に、それを生み出す因子（上記）が内在することが指摘できる。それを日本人が日本語の表記の要素としてだけでなく、語基や接辞としても用いることで、爆発的に拡大させたのである。

誤記は、生理的な因子に加えて、様々な心理的因子が影響して生じる。たとえば「化粧」「二塁手」といった語の書き取りの正答率には、ジェンダーによる差が現れる。

年代差も見られ、「うるさい」を「五月蠅い」ではなく「八月蝉い」と書く人が若年層に増えつつある。政策、辞書、NHK などの放送局や新聞各社などでは、こうした変化に対し、現実の習慣をある程度慎重に見極め、協議し取り入れつつある。NHK ではやっと「雪ぴ」「とら年」という表記をやめた。

とくにこの心理的な作用の中に、論理性を超越した文字感、表記感という他の言語にはほとんど見られない感覚が、日本人の感性によって育まれてきた。

さらに文字や言語の特徴によっても、振る舞いには違いが出る。共通の文字を用いる集団には、国家、地域、社会、個人などと大小様々の単位が認められる。日本のいわゆるムラ社会もここに一定程度反映している。政府内でも、文部科学省(内部では文化庁とは必ずしもすべての施策が一致するわけではない)、法務省(同じく戸籍担当と登記担当と入国管理局、警察などで異なる)、経済産業省、総務省など、縦割り行政の中で、漢字の基準や扱いはバラバラになっている。デジタル庁の中でも議論が行われている。

漢字に関する地域差は、言語と対照的に漢字においては通常意識に上りにくいものであるが、

「一昨日」(おとつい　近畿)「濃い」(こい　こゆ　中国、九州)「掃く」(はわ　九州)

などの読みや、「しばれる」など俚言の表記「凍れる」などに見られる。

名字や地名には現在も顕著に表れ、

新冠(にいかっぷ　北海道)
牛坂(べこざか　秋田)
渋谷(しぶや　東京：しぶたに　大阪)
十八女(さかり　徳島)
北浜(にしはま　沖縄)
垰(たお　中国)

など、各地に点在している。

小説を好む読書家は漢字に強いという傾向がある。漫画好きは、「本気と書いてマジ」式の当て字を覚えやすい。「まじめ」に「真面目」を当てたのは江戸時代だが、常用漢字表の付表に 2010 年に追加された。漫画では落語界からの「本気」、歌謡曲では「真剣」、ケータイでは「馬路」(地名)も流行ったが、「マ」「mjk」(まじか)と短縮が続いている。「本気」「真剣」は、マジからガチと読ませることも起きた。

高年齢層による「がんばってネ」「元気カナ」というような終助詞の表記が「おぢさん構文」として若年層に位置付けられる傾向もある。難字の使用がマウント取りと感じられることによるミスコミュニケーションまで起こっている。役割表記となって、若年女性が

模倣し始めている。

誤字には、社会的な傾向性が認められるものがある。「完璧」は、一般によく書き間違えるが、東大生には正しく書ける人が多いというような大学間格差が確かめられる。しかし、その東大生も「双璧」はほとんどが「壁」で書いてしまう。一方、漢字検定１級取得者は、たいていきちんと書けるというように集団による差が見いだせる。

上記のそれぞれに、場面による差が発生しうる。場面は、使用する相手、社会的な状況、文章の文脈や文体など幅広くとらえることができる。このようにレベルを異にする種々の条件が因子となって文字や表記を生み出し、選択し、変化させてきた。ただ一般の使用者はもちろん研究者もこうした現象と背景の整理と分析をほとんど行ってこなかった。

この煩雑な現象の中心にあるのは、「奥深い」と言って使用者を思考停止にいざなう漢字である。擬人法による「ことばは生きている」と通底する情緒性に偏った常套句である。漢字を巡る複雑な状況は、日本語使用者に愛着と劣等感をもたらしてきた。漢字が好きなのに、使いこなしているという自信が持てず、コンプレックスと羨望とが同居しているのである。

漢字を我がものとして使いこなすことは多くの日本の人々にとって成長の証であり、仮名が成立した平安時代以降も、漢字は知性の象徴でありバロメーターとなる絶対的な存在の文字であった。ネイティブさえも間違える文字と表記を、マニアでもない一般の外国人、とくに非漢字圏の学習者に完全に習得させきることは容易ではない。

新しい表現や表記法であっても、多くの日本人が、しっくりきたものは定着し、辞書にも載る。古来のものと誤解されることもある。「秋桜(コスモス)」は、山口百恵の曲名(1977)により一気に広まり、辞書にも収録された。季節感と自然を好む日本人が、歌詞と曲調と相まってコスモスを再評価するきっかけにもなった（笹原 2022）。

当て字は略語を生む効果を持つ。ニュージーランド大使館による、同国国名への当て字募集(1980)において、「乳」が最多の得票数を得た。しかし本国から、重工業製品の輸出の妨げになるとの苦情によって即時廃止された(笹原 2014)。その結果、「日豪関係」とは言える一方で、「日 NZ 関係」とは言えない。

漢字仮名交じり文は平安時代に萌芽し、江戸時代以降、漢字、ひらがな、カタカナなどが混じる形式を得た。文字と表記法則・個々の表記を覚える労力、筆記(特に手書き)する労力は少なくないが、基本と概略を身に付けてしまえば、読む際の情報抽出の効率は高い。

一方、教育や慣習などに基づいて誤りと認識されるものに対しては、規範意識が働き、否定的な評価が下されることがままあり、寛容性に弱い面がある。「後で後悔」を批判する割に「後悔」の形態素「後」も意味が重複していることには気づかない（「懺悔」も同様）など、理が前面に出ることは多くはないが、たとえば名詞の「日日」(日にち)や慣用句的な「被害を被る」のように衍字ではない文字の重複にも、とくに読み書きする際に重言的と評価されがちである(そのわりに「授業を受ける」の類が対象化されることはまれである)。

一方、衝突をきたすケースに対しては、それを回避する行為に関して理解が早い傾向がある。「茨城」は「ーき」と読むのが正しいという言説がマスメディアなどで広まった

が、大阪の「茨木」は「き」か「ぎ」かに対して比較的柔軟である。
　こうした個々の事象が複合し、世界に類を見ない文字と表記の多様性が今なお拡大しつつある。

6　応用

　実は、日本社会において、こうした文字・表記の体系と機能から醸しだされる文字感、表記感は様々に応用がなされている。「英吉利」「英國屋」は、その例に過ぎない。言語心理学、行動経済学やマーケティングとも関わる領域である。
　　鮨　寿司　すし
　　コーヒー　珈琲
どちらが高級に感じるだろうか。
　店名では、笹原が経営すれば、あえて交ぜ書きにした「ささ原」は小料理屋に、「笹はら」は料亭にありそうだ。
　こうした「抜き漢字」という手法は、「らく」「けっきょく」「ニクい」「センセー」「テキトー」「ヒロシマ」などで使われている。「納トク」のような「当てカタカナ」の類とは意味を付加するか否かで区別できる。
　日本では選挙に、同姓同名の人たちが立候補することがある。とくに地方議会においては、そういう事態が起こる。マニフェストがみな同じだった場合、選挙ポスターや投票用紙を見たときに、誰に入れようという気持ちが起こるだろうか。

　　笹原宏之　　笹原ひろゆき　　ささはらひろゆき　　ササハラヒロユキ

　様々な集団で、投票行動に傾向性が存在することが判明している。むしろ絵本作家やミュージシャンならば好まれる表記もあろう。このように、日本語の文字・表記は、気付かないうちに経済、そして政治の分野にまで影響を与えているのである。

7　おわりに

　このように日本の文字、表記の要素と機能の多様性は、種々の言語外の効果まで生み出している。それは日本人の心性と密接に関わっており、影響を与え合ってきたといえる。
　実は「乱れ」は、巷間に言うほど深刻なものではない。女子高生がプロフやプリクラに書く、「因囚」「仲仔」などは変異であり、一般化することはない。もしも一般に使用が広まるとすれば、それは共通の文字や表記の体系の網に空き間があり、何かが必要とされているところに、しっくりくるものが入り込む、という自然な現象として捉えることができる。
　漢字は、中国では拡張性を持つ文字として出現したが、国家による統制によって一元化していった。

一方、漢字を受容した日本では、用法に自由さを加えた結果、体系化よりも個別化の方向に進んだ。政府によるコントロールは今も強力ではなく、状況はカオス化の様相さえ呈する。作製や仕様の場面で、論理性よりも情意性が優先される傾向があり、文字集合は要素も機能も開放系、複雑系をなしている。過去から続くそうした土壌と状況をふまえたうえで、日本社会における文字の使用者には読み手への配慮が、受容者には書き手への寛容という相互理解を前提とした余裕ある姿勢が求められる。

固有名詞の一つであり日本語の名詞の一角をなす姓には、「小鳥遊」（たかなし）など遊戯性の感じられるものが実は古くから存在してきた。名前にも、その例はおびただしくある。本人がみずから変えたものであれば「外骨」「耕筰」(笹原 2017)など致し方ない。飛鳥時代の「入鹿」、安土桃山時代の「まりや」、森鷗外の子の「杏奴」など、各時代に斬新な命名は行われてきた。社会の変化に伴い、「恭子」「孝夫」のような名の流行が終わったことも明らかである。

昭和期に萌芽した姓名判断と称する熊崎式の画数占いは、当て字の「仏滅」と同様にアニミズム的な文字霊思想の流れにあると捉えうる。漢字を言語表記の手段、ツールとして客体化する姿勢が一般に十分ではないことがベースに横たわっている。

自由と放埒は紙一重であり、その境界線は可変的であるが、想像力をもたない親が付ける名前においては伝達機能を逸脱した例が増えてきた。日本では、すべての戸籍の氏名に読みガナを付す政策が来年実施される（発表者はその審議会の委員でもあった）。それを決める過程では、新規の読ませ方を国が受理しなくするという、「キラキラネーム」を排除しようとするあまり、言語変化の根まで絶とうする力が加えられた。「彩」の「あや」さえも危うかった。すでに「月」という名に 40 通り、「愛」という名には 100 通りもの読み方が見付かっている。様々な文字や表記を作り、使ってきたが反省的でないために拡張する一方となり、遡って由来を調べることも困難となっている。そして無意識に歴史を繰り返すことがある。音声よりも文字を重んじる意識が随所に現れているうえに、「腥」のような字まで、字面の雰囲気だけから命名に選ぶ人も増えてきた。

そこには、一点一画を書きながら偏旁などを組み立てていく従来の筆記行動ではなく、キーボードでローマ字や仮名を打って画面上に現れた漢字を選択するという文字産出行動も関係しているのであろう。日本人にとって「禁断の果実」であった漢字は、ついに表イメージ文字に至ろうとしているかのようである。

日本語の文字の現状を教師が十分に捕捉し、学習者の楽しみとなるよう指導していけば、現実の文字という社会的なツールによるコミュニケーションに直結する力が養成できるであろう。ことに手書きと電子機器への入力との間で、文字・記号による表現の差が大きくなりつつあり、まず母語話者自身の内省・観察・学習による現状の理解が不可欠だと考えられる。

主要参考文献

シャルコ・アンナ(2022)『日本語の表記体系における漢字の機能　―外国の地名・人名の表記を中心として―』　早稲田大学　博士学位論文

千葉謙悟(2010)『中国語における東西言語文化交流 近代翻訳語の創造と伝播』　三省堂
中村　明(2014)『日本語のニュアンス練習帳』　岩波ジュニア新書
読売新聞社会部(1975,1976)『日本語の現場』1,2　読売新聞社
笹原宏之(2006)『日本の漢字』　岩波新書
笹原宏之(2007)『国字の位相と展開』　三省堂
笹原宏之(2010)『当て字当て読み・漢字表現辞典』　三省堂
笹原宏之(2014)『漢字に託した「日本の心」』　NHK 出版新書
笹原宏之(2017)『謎の漢字　由来と変遷を調べてみれば』　中公新書
笹原宏之(2022)『漢字ハカセ、研究者になる』岩波ジュニア新書
Sasahara,Hiroyuki(2022) 「Chinese characters: Variation, policy, and landscape」『Handbook of Japanese Sociolinguistics』　pp.605-628　Germany　Mouton